

み顔の光を仰ぎ見

出エジプト記 34 : 29 - 35

ルカによる福音書 9 : 28 - 36

コリントの信徒への手紙 I 13 : 8 - 12



司祭 ヨハネ 井田 泉

2025年3月2日

大齋節前主日

上野聖ヨハネ教会にて

大斎節を目前にした今日の特禱に「**み顔の光**」という言葉がありました。み顔とは神さまの顔です。どうかわたしたちが、神さまのみ顔の光を仰ぎ見ることができますように、という祈りを献げたのです。それはわたしたちが、神さまをより近く感じながら生きるためです。

わたしたちは普段、「神の顔」などということを考えたり想像したりすることはあまりないかもしれません。けれども聖書には神の顔、主イエスの顔のことが書かれていますので、今日はそれに近づいてみたいと思います。

「神の顔」について、古くからの大切な言い伝えがあります。アブラハムの孫、ヤコブの物語です。ヤコブは兄エサウの激しい憎しみを買ひ、遠くに身を避けて暮らしました。20年ぶりに一家を率いて戻って来たのですが、ヤボク川の前に立ち止まって向こう側に渡ることができませんでした。エサウが恐ろしい。自分は殺されるのではないかと心配でならないのです。ヤコブは恐怖を抱え、「神よ、救ってください。兄エサウと和解させてください」と一晩中祈って神と格闘しました。その果てにヤコブは神の祝福をいただき、川を渡る決心がつくのですが、そのとき彼はこう言いました。

「わたしは顔と顔を合わせて神を見たのに、なお生きている。」

創世記 32:31

当時、人は神の顔を見ることはできず、万一それを見た者は

死ぬ、と信じられていたのです。ヤコブはその場所を「ペヌエル」（神の顔）と名付けました。彼は、自分が神の救いの奇跡を経験したことを忘れないために、地名として刻みつけたのです。

さて、今日の旧約聖書です。イスラエルの民を奴隷の家、エジプトから脱出させたモーセは、人々をシナイ山に導きました。そこでモーセは人々を麓に待たせてさらに山を登り、神と出会います。そして神の手から十戒を刻んだ2枚の石の板を受け取りました。ところが山を下りてきたモーセが見たのは、早くも神を忘れて金の子牛を拜んで踊り狂う人々の姿でした。激怒したモーセは、せっかく神からいただいた2枚の石の板を投げつけて砕いてしまいます。

人々は自分たちの過ちを嘆き、モーセは人々の罪を命がけで執り成して神に祈りました。そうして神の赦しを得て、もう一度山に登って十戒を刻んだ板を神からいただきます。そこから今日の箇所が続きます。

「モーセがシナイ山を下ったとき、その手には二枚の掟の板があった。モーセは、山から下ったとき、自分が神と語っている間に、自分の顔の肌が光を放っているのを知らなかった。アロンとイスラエルの人々がすべてモーセを見ると、なんと、彼の顔の肌は光を放っていた。彼らは恐れて近づけなかった」

出エジプト記 34:29-30

自分は知らなかったけれども、神と語っている間にモーセの顔の肌が光を放っていたというのです。モーセの顔の輝きは、神の顔の輝きを反射していた、ということではないでしょうか。神と離れて人々のところに戻って来ても、モーセの顔は光を放っている。「彼らは恐れて近づけなかった」。神が間近におられるのを、モーセの顔の光をとおして感じた。神を畏れる、ということを経験したのを知り、経験したのでした。

やがて神の民の中にこのような祈りが生まれました。

「神よ、御顔の光を輝かせ、わたしたちをお救いください。」

詩編 80:4

詩編には「御顔の光」という言葉が9回も出てきます。神にそばを向かれるのが怖い。御顔をこちらに向けて、わたしたちを見守ってください。神は畏るべき方ではあるけれども、やはり救いの神、愛の神なのです。神が御顔の光を輝かせてわたしたちを照らしてくだされば、わたしたちは希望を持って生きることができる。

「神よ、御顔の光を輝かせ、わたしたちをお救いください。」

わたしたちもそう祈りたいと思います。

さて今日の福音書、主イエスの変容貌の場面です。

「この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。」ルカによる福音書 9:28-30

イエスに連れられて山に登った3人の弟子たち、ペトロ、ヨハネ、ヤコブは、祈っておられるイエスを見つめていました。

「祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」

ここにイエスの顔のことが語られています。

「イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。」

服の輝きが中心ではありません。イエスの服の輝きは、イエスの顔の輝きを反映しているのです。祈っておられるうちに、イエスの顔が輝きはじめた。先ほどのモーセと共通しています。祈るとは神と語り合いです。イエスは今、神と顔と顔を合わせて語り合い、祈っておられた。神の顔が輝き、イエスの顔が輝きます。弟子たちは畏れたでしょう。けれども恐れつつも、イエスの顔の輝きの清らかさ、美しさ、力強さを見たのではないのでしょうか。このあと、ペトロは言います。

「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」

ルカ 9:33

旧約聖書の代表人物と言うべきモーセとエリヤがここに一緒にいるのはすばらしい。けれどもそれ以上に、顔を輝かせられるイエスがおられることがすばらしい。イエスの顔の輝きはペトロに喜びと幸せをもたらしたのです。

今日わたしたちは、モーセの顔の光を、そしてイエスの顔の輝きを見つめたのですが、さらに使徒書が、神の顔あるいは主イエスの顔のことを語っていたのに気づかれたでしょうか。

今日の使徒書の後半、コリントの信徒への手紙Ⅰの第13章は「愛の賛歌」として知られる箇所です。その後半から読んでみましょう。

「愛は決して滅びない。預言は廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう、わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。……わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」13:8-12

今、わたしたちが見ている「鏡におぼろに映ったもの」とは何でしょうか。それは神の御顔、主イエスの顔です。昔の鏡はくっきりとは見えなかったのです。今、わたしたちは、まだはっきりとは主イエスのことをわかっていないかもしれない。

「だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。」

将来、主イエスが再び来られて世界の救いを完成されるそのとき、わたしたちの顔と主イエスの顔が出会う。顔と顔を合

わせて見る。主イエスの顔は輝く顔、喜びの笑顔です。あなたがたに会いたかった。あなたの顔を見ることができてうれしい。イエスがわたしたちの顔を見て喜んでくださる。そのとき、わたしたちもイエスの顔を見て喜びに溢れる。そのような幸せが待っているのです。

「わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。」

今は神さまのこと、主イエスのことを一部しかわたしたちは知らない。しかしそのときには、「はっきり知られているように」。わたしたちはすでに神さまにはっきりと知られている。わたしたちは主イエスについて一部しか知らなくとも、主イエスのほうは、わたしたちのことをよく知っていてくださる。わたしたちの不安、苦しみ、葛藤も知っていてくださる。そしてそのときが来たら、わたしたちも主イエスのことをはっきりと知ることになる。どんなにイエスがわたしたちを愛していてくださったかをはっきりと知るのです。

祈りましょう。

神さま、主イエスのみ顔の光を仰がせてください。主が再び来られるとき、顔と顔を合わせて出会い、わたしたちを限りなく愛していてくださるイエスのみ顔を見てともに喜ぶことがで

きますように。その時を目指して、希望をもって歩ませてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン